

本との出会いを楽しむ 第16回

老いては子に従え!?

食料科学研究所教授 中井 雄治



2014年3月の着任以来、青森市に単身赴任しています。だいたい2週間に1度家族の住む茨城に帰り、往復には主に新幹線を使っています。正直なところ道中は寝てしまうことも多いのですが、起きているときは論文を読むか、読書をしています。

上野駅の駅ナカにわりと気の利いた本屋があり、青森に戻る際には車中で読む本をそこで物色することもあります。最近では娘のお薦めの本を読むことが多くなりました。

娘は中学生ですが、通っている学校が始業前に読書の時間を設けていることと、読書好きの家の影響か、かなりの読書量で、私よりもずっとたくさん本を普段から読んでいます。帰省すると、娘がときどき「お父ちゃんこれ面白いから読んでみ。」と薦めてくれます。

まあ、娘がそういうので借りて読んでみると確かに面白い本が多く、中でもよかったのは青柳碧人（あおやぎ・あいと）の『浜村渚の計算ノート』シリーズ。政府の政策によって義務教育から数学が排除された、という設定で、数学教育復活をもくろむ数学テロリストの起こす事件を、主人公で数学好きの女子中学生が持ち前の数学センスと知識で解決していく、というお話です。

今でこそ大きな書店では平積みになるくらい人気がある小説ですが、娘が薦めてくれたころはまだそれほどでもなく、もしかすると先見の明があったのかもしれませんが。

第3巻には、北海道新幹線で函館まで行く、なんていうお話まで登場します。書かれたのは開通前ですが、よくできています。よく読むと、3列シートと2列シートが左右逆に記述されていますが、フィクションですし、それもご愛嬌。

内容的には数学が見事にエンタテインメント化されていて、作者の数学に対する愛が感じられます。私も学生時代にこのような本に出会っていたら、数学が好きになって違う人生を歩んでいたかもしれません。

実は次に読む本ももう決まっています。吉川英治の『新・平家物語』が控えています。こちらは娘が学校の古文の授業で平家物語が題材になったことをきっかけに興味を持ち、読んでみたところやみつきになったそうです。茨城の家にはすでにシリーズがずらっと並んでいて、全部読むのには上野-新青森間、何往復かかるかわかりません。

まだ「老いては」というほど老いていないつもりですが、こと本に限っては娘の薦めるものを当分の間読むことになりそうです。

(なかい ゆうじ)

中井先生にご紹介いただいた『浜村渚の計算ノート』シリーズ、『新・平家物語』は残念ながら本学では所蔵していませんが、吉川英治の作品は何冊か所蔵しています。

所在：「忘れ残りの記：吉川英治四半自叙伝」

和図書（第1書庫2F）請求記号：999||Z9||Y0

図書ID：20000664

「吉川英治集（昭和文学全集26）」

和図書（第1書庫2F）請求番号：918.6||Ka14||26

図書ID：90437150